NEXUSYS 11

THE ELEVENTH BODY

BOOK III — THE SIX-YEAR STATE

第２章　消された埠頭

THE BERTH THAT HAD BEEN ERASED

潮位が階段を露出させたのは、六時四十二分だった。どの海図も、その階段の存在を認めていなかった。

クチンは海岸を取り除かずに、海岸を消す術を身につけていた。新しい税関の堤防は古い護岸から二十メートル外側に立ち、そのあいだを市のシステムが「公共交通アクセスの改善」と登録した歩道橋が結んでいた。二世代のコンクリートの隙間には、扉、巻揚機、銅の伝声管、そして河が昔の名を守り続けると信じていた人間たちの刻んだ銘文があった。百年にわたる改築も泥を動かしはしなかった。ただ、都市に自分の基礎の形を否定する方法を教えただけだった。

ナディラが最初に階段を下りた。無印の水道検査官用コートを着ている。補強された裾のせいで、実際より歩みが遅く見えた。イレーナは船長から借りた診断ケースを抱いて続いた。ケースの絶縁材はコルクだった。近くにあるものすべてに話しかけたがる現代の軍用カーボン素材を、彼女は信用していない。ロイは上の踊り場にとどまり、川を上る巡視艇の音を聞いていた。

三隻いた。一隻は通常の規制巡回航路を維持している。もう一隻は航行灯を消して逆流を進んでいた。三隻目は十一分間停止したままで、その機関は商用測量ドローンと一部の政府迎撃機に共通する狭い周波数帯の振動を発していた。その不確実性は、眼の奥の場の感度を上げなければ解けない。ロイは上げなかった。

「大丈夫？」とナディラが聞いた。

「いや。だが今のところ、俺たちは目立たない。それで足りるかもしれん」

階段の下には、もっと古い黒い数字を覆い隠す白い長方形が塗られていた。剥落した塗料の下から、数字の四が浮かんで見える。船で受け取った伝票には〈証人回線第四号〉とあった。この場所について、その一致ほど説得力のないものもなかった。

ナディラが機械式の投入口へ伝票を差し込むまで、扉は内側に開かなかった。読み取り光は点灯しない。壁の向こうで鋼鉄の輪が動き、建物の深部で鐘が一度鳴った。水没した楽器を誰かが叩いたような、低い音だった。青いシャツの老人が隙間から三人を眺めた。

「二人のはずだったが」

「そちらの通知が、事情の変わる前に書かれたのよ」とナディラ。

「三十一年前に書かれた」

老人はロイを見た。眼でも背丈でもない。両手を見た。

「入りなさい。潮が下の階段を呑めば、君たちが入ったと証言できる者はいなくなる」

扉の先は、置換の記録を集めた資料室だった。木の引き出しは岸壁、埠頭、ポンプ、門、人物の順に分類されていた。最後の分類が、ほかのすべてを合わせたより広い場所を占める。退役したプロッターが大理石の台に載せられ、電源から切り離されていた。筆記用のキャリッジは青い布で縛られている。真鍮の銘板には〈結果を伴う置換局〉と刻まれていた。現代の行政機関なら、これほど正直な名を局につける勇気はないだろう、とナディラは言った。

管理人はトマス・ヴェンと名乗った。仕事は引き継いだが建物は引き継いでいない。記録は引き継いだが、記録が隠した名前は引き継いでいないという。第七世代のポートを検証できるか、とイレーナが尋ねると、彼は、検証できるのは何かが置き換えられたときの事情だけだと答えた。細い台帳の棚を示す。

「人は、何が生き残るかを定義したくないときに『置換』という言葉を使う」とヴェンは言った。「同じ形の部品も、同じ部品ではない。同じ形の人間なら、政治上の非常事態だ」

ロイはおなじみの苛立ちを覚えた。深圳を出てから訪ねたあらゆる機関で感じてきたものだった。単純な問いへの答えを守るために、精巧な防壁が築かれている。「ここに起動用の治具はあるか」

「ない」

「どこにあるか教えられるか」

「それが不在であることに、誰が署名したかなら教えられる」

その答えで室内の空気が変わった。イレーナはケースを開く手を止め、ナディラは船の伝票を机に平らに置いた。ロイは腕を脇に下ろしたまま、説明を待った。

管理人は半透明のスリーブに封じた記録を取り出した。紙には数十年を隔てた二つの署名がある。最初の署名はタイレル関係の倉庫の閉鎖を宣言し、二つ目は倉庫が閉鎖されても残された二基の治具へのアクセス義務は消えないと証明していた。三つ目の欄は意図的に空白のまま残されている。余白には船の伝票にあったのと同じ筆跡の言葉が記されていた。REPLACEMENT。

「登録簿から何かが削除されている」とイレーナ。

「元のものが終わったという証明なしに、何かが置換されたのだ」とヴェンは訂正した。

「治具が？」

「証人だ。最初の様式では、その証人は一人の人間だった。後任の行政官はそこへ法人を記入した。次は公的機関だった。後継者はみな、自分が正当であると自分で証明した。最初の証人は一度も役目を譲渡していない」

ナディラは紙を見つめた。「なら、それ以降の移転はどれも完了していないことになる」

「未完了の移転が問題になると証明できれば、だ。法制度というものは、守るために作られた事実が失われても実によく生き残る」

ロイが書類に手を伸ばすと、ヴェンは指が触れる前にスリーブを押さえた。

「読むのは構わない。持ち出しは認めない。この紙は君の請求より古く、それを作った人間より新しい」

「最初の証人は誰だ」

老人がページを裏返す。時代遅れの企業略記で、〈生物学的継続性――例外〉と記され、その次の英数字欄は擦り削られていた。二文字だけ残っている。頭文字かもしれないし、機械可読番号の末尾かもしれない。判読できる名前はない。

「復元する方法はあるわ」とイレーナ。

「作り出す方法もある」とヴェン。「その二つには同じ機器が使われることが多い」

ロイは〈生物学的〉という語を見た。国家は彼の分類が不確かであることを嫌ってきた。〈人工〉という単語なら好む。人工物と呼べば、許認可し、貸与し、回収できる。だが、彼が占めてきた身体が複数あったという仮説が正しければ、それらは一つの体系に収まらない。組織は培養され交換され、構造は何世代もの再設計に耐えたポートを受け継いだ。別の都市の雨の中で彼は死に、動く扉の重みを先読みする手を持って目覚めた。この文書が継続性を何と呼ぼうと、記憶を証拠に変えることはできない。

「知っていることを話せ」と彼は言った。「規則上、話してよいことではなく」

ヴェンは長いあいだ彼を見ていた。「企業が清算されて最初の年、一人の女性がここへ来た。保管者をもっと耐久性のある代理者へ置き換えても、保護対象の所有権を移転せずに済むかと尋ねた。私はまだ管理人ではなかった。先任者の記録には、彼女が水の試料を持っていたことと、名乗るのを拒んだことが書かれている」

ナディラが動きを止めた。イレーナはロイを見たが、彼は見返さなかった。

「水の試料を持った女か」

「水の試料を持って来る者は大勢いた。ここは港だ。だが、まだ製造されていない人間の権利を尋ねたのは一人だけだった」

老人はそれ以上付け加えない。もったいぶっているわけではなかった。記録には本物の穴があった。

頭上で通常巡回艇の一隻が新しい堤防のそばで速度を落とした。潮流に逆らって機関が補正する音をロイは聞いた。天井へ顔を向ける。

「誰かがつけてきた」

「当然だ」とヴェン。「人口登録簿にない人物について尋ねる者は、誰でも追われる。問題は、向こうが君を見つけたと知っているかどうかだ」

⁂

岡京で川村室長が受け取った移動報告は、一枚の紙片だった。省のネットワークにつながっていない印刷機から出力されている。情報源は河川管理局の私的な監視員。光学画像は含まれない。統一地図から省かれた岸壁の無通電資料室に、未登録の男一名と同行者二名が入った、という記載だけだった。

隣室にはヒューマノイド統括大臣が待っていた。寿命六年統治案の発光模型の下に座っている。向こう側の壁では、連邦加盟国の広域表示が、各管轄区域の立法適合審査が完了するたびに色を変えていた。ほぼ終了した地域もある。病院、重工業、それに最後まで残る商用二十五年型をめぐって例外を交渉している地域もある。所有者たちはそれを生命ではなく投資と呼ぶことに固執していた。

「見つけたのか」と大臣。

「彼に見つけさせようとした記録を見つけました」

「その区別がこちらに有利でない限り、区別するな」

川村は紙を机に置いた。「対象は、統一条約よりも古い管轄権を持つ資料室へ近づいています。入室しても検査への同意にはなりません。協力を要求することはできますが、公の紛争なしには強制できません」

「機械をめぐって紛争だと？」

「機械に拒否する権利があるか、という紛争です。批准の途中で裁判所に持ち込みたい事件ではありません」

大臣は地図を眺めた。「六年は残酷な行為ではない。既存の身体は故障する。記憶は構造的に不安定になる。運用者は責任を負う。あらゆるシステムに交換周期がある」

「では、なぜ六年なのですか」

「すべての国家が六年なら管理できるからだ」

委員会の決定を事実と呼ぶとき特有の、消毒されたような自信だった。川村は内部推計を読んでいた。ある個体群では、六年は実証された稼働可能期間を大幅に下回る。別の個体群では、本来退役すべき身体をさらに保守できてしまう。選ばれたのは生物学的な理由ではなく、対称性のためだった。相容れない政府同士が、それぞれの計画 AI に支配権を譲ることなく合意できる数字。

「 商用二十五年は、まだ可能です」

「 今のところはな。独立した結びつきを獲得するほど年を取れば、危険は変わる」

「 何との結びつきですか」

「 財産。家族。政治運動。稼働年数が一年増えるたびに、計画外の主体性が分配される」

大臣は率直に言いすぎた。川村にはわかった。室内は録音されていないが、壁の模型には遠隔測定情報が流れている。川村は現地のブレーカーで電源を落とした。

「 それでも基礎研究のことを中央計画 AI に知らせたくないのですね」

「 ある個体群の法的寿命を短縮しようとしながら、生命を無期限に延ばすかもしれない技術を調べている。その事実をアルゴリズムに観察させたくない。政治的多数派の誰にも説明できない理由を要求してくるだろう」

「 レイチェルは無期限延命を証明していません」

「 いずれ証明するかもしれない。だからモデルが政策を疑う根拠を得る前に、彼女の研究が必要なのだ」

大臣は報告書を机の向こうへ押し戻した。「 証人関係の書類を回収しろ。暴力なしに対象を確保できないなら、象が調べにたものを回する」

「 記録に名前がなければ？」

「 行政上の名前を与えればいい」

川村は答えずに紙を折りたたんだ。大臣はその沈黙を同意と受け取った。よくある誤解であり、今のところ川村には都合がよかった。

⁂

古い岸壁でヴェンは別の引き出しを開けた。中には宛先を失った六通の封筒があった。どれもすでに存在しない機関に宛てられ、同じ証人回線の印章を押されている。彼は封筒を並べ、推定上の身元が記されたものではなく、日付のあるものを選べとロイに告げた。

「なぜだ」

「名前は割り当てられる。日付は説得の余地が少ない」

ロイは死後最初の年に一致する封筒を選んだ。ヴェンは番号を声に出して読ませ、その年のことを何か覚えているかと尋ねた。ロイは屋上と、殺さないことに決めた男について語った。それ以上は語らなかった。記憶が現在の身体の構造に属するものなのか、それとも身体を越えて残った何かなのか、彼にはわからなかった。

「閲覧には十分だ」とヴェン。「所有には足りない」

封筒の中にあったのはメモリーカードではなく、細いフィルム片だった。レンズの下でイレーナは、初期のテキサス・インスツルメンツ製産業用コントローラーに使われた印字形式を見つけた。下端には三つのチェックサムがある。二つは抹消され、残った一つは旧式認証チェーンとキャッシュ再構成イベントを参照していた。

顔を上げる。「これは元のシステムデタじゃない。アクティベションの受領よ」

「何回の起動？」とナディラ。

「少なくとも一回。受領証が一枚残っているだけでは回数は推定できない」

ロイはレンズを受け取った。文字は窮屈に並び、印字にもむらがあった。レンズの斜めの照明なしではほとんど読めない。隅の製造番号の下に、技術者の手書きの語句があった。ORIGINAL NOT PRESENT——原本不在。

理由のわからない苛立ちが生じた。Memory Stick の原本を指すのかもしれない。証人か、ある個体か、製造に失敗した試料かもしれない。書いた者は、後の誰かがそれらの意味を区別しなければならなくなるとは考えていなかったのだろう。

「どうすれば答えが出る」

「受領証をたどり、署名した人物に行き着くことだ」とヴェン。「その人物が今も生きているとは思わないことだ」

壁の向こうで空気が短く脈打った。雷鳴には短すぎる。資料室の灯りが揺れ、熱くなった絶縁材の鋭い臭いが入ってきた。引き出しの上の真鍮時計はほんの一瞬止まり、針では表せない一拍を失ってから動き始めた。

イレーナは電子攻撃だと見抜いた。「指向性エミッター。外よ。まだこちらは狙っていない」

部屋を横切り、古い扉を破り、その向こうで位置につきつつあるはずの機械を無力化するのに必要な出力を、ロイは考えた。意識的に呼び出す前に計算が始まる。視野の端にリザーブ表示が現れ、拳を緩めると消えた。その計算を支える流体は、戦いに生き残ったからといって戻るわけではない。

「戦わない」と彼は言った。

ナディラはすでに、ヴェンの机の後ろにある保守用ハッチを開けていた。現在の設計図から消えた水門の縦坑へと続いている。暗闇の水は、認証など一度も必要としたことのないものの辛抱強い確かさで動いていた。

ヴェンは開いた引き出しのそばに残った。「潮が門を持ち上げるまで十二分だ」とナディラに告げた。「そのあとは、縦坑が喉になる」

「一緒に来い」とロイ。

「私の記録は泳げない。存在したと証言する者が一人は必要だ」

「逮捕されるかもしれない」

「 政府が否定してきた場所の存在を思い出したとき、その行為を政府は逮捕と呼ぶ」

ロイはもう一度だけ受領証を見た。カードには触れていない。失われた世代にもアクセスしていない。誰が自分を作ったのか、あとどれだけ生きられるのかもわからない。それでも一つの事実が変わった。彼の復元を取り囲む記録のどこかに、行政官が〈原本は存在しない〉と書き残していた。存在しないことと、破壊されたことは同じではない。

イレーナが灯りを消した。ナディラは縦坑に身体を下ろす。ロイも続いた。上でヴェンがハッチを閉め、引き出しを押し戻す音がした。古い石壁を通して機械的なノックが響き、続いて、建物が認めていない法律を根拠に立ち入りを求める、調子の整った声が聞こえた。

クチンは消えた港を見つけにくくしていた。そして今、その港から出ることも難しくなろうとしていた。

水面下で縦坑は二つに分かれた。一方は川へ戻る。航行灯のない巡視艇が待つ方だ。もう一方は旧式ポンプ場の下へ下る。銅製の経路標識は、ロイが最初に死んだ時代のさらに前世紀以来更新されていない。

ナディラは地図も見ずに二つ目を選んだ。

「 どこへ出る」とロイ。

「 古い記録と新しい記録を一致させられなくて、政府が封鎖した場所」

「 その先は？」

彼女はランプの角度を直した。「その先で、原本には誰の署名があるはずだったのかを確かめる」

ロイは答えなかった。はるか上で雨が再び降り出し、都市の別々の系統を伝って落ちてくる。同じ雨水に、それぞれ異なる管轄権が与えられている。彼は耳を澄まし、背後の人間の足音と壁の中の機構音を聞き分けた。一つのシステムは、存在するものを数える。もう一つは、消えたものを記録する。どちらにも、数えているのが同じ男なのかどうかはわからな

かった。